

ハイスクールD×D 邪神に拉致された元普通の高校生

真庭猟犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごくごく普通のどこにでもいるような日本男子の主人公が邪神に拉致されてハイスクールD×Dの世界にトリップ!
常識を真正面からぶつ壊す能力を駆使して主人公が原作ブレイク、救済をしながら大暴れするハチャメチャストーリー。

目 次

第0章 異世界渡りの邪神系ドラゴン

主人公のステータス

邪神龍参上

何時もの日常と新たな出会い

邪神龍と猫又姉妹の旅 その①

邪神龍と猫又姉妹の旅 その②

邪神龍と猫又姉妹の旅 その③

邪神龍と猫又姉妹の旅 その④

邪神龍と猫又姉妹の旅 その⑤

邪神龍と猫又姉妹の旅 その⑥

オリキヤラ紹介 その①

邪神龍と猫又姉妹の旅 その⑥

旧校舎のディアボロス

邪神龍のモノローグと原作の始まり

ちよつとした補足

ほんのり這いよる異常な日常

赤龍帝、知られざる現実を知る

報告と自己紹介

第0章 異世界渡りの邪神系ドラゴン

主人公のステータス

名前：呉羽翔悟
くれはしょうご

性別：男

年齢：（拉致される前）18？（拉致されてトリップした後）6（二年生勢と同じ）？（原作開始時）17

種族：元人間。現在は邪神の力を持つドラゴン（勝手に改造された）容姿・黒髪黒目（髪型はゼロ魔のサイトを参照）。原作『ハイスクールD×D』の世界基準で上の中くらい。

身長：178cm

性格・娯楽主義な所があるが、基本は面倒見が良い。境ホラ梅組メンバー並の外道

神器：『数え切れぬ負の遺産』（怒りや絶望等を糧として過負荷に匹敵する武器や能力を創る神器。邪神の波動によつて覚醒した）

『常識破りな邪神龍の遊び』（翔悟のドラゴンとしての力を抑えた状態（それでもグレートレッド・オーフィスと同等の強さ）の時のみ使える神器（もどき）。相手の神器、能力をコピーし、好きなように改良して自分の神器として具現できる能力を持つ）

学年：私立駒王学園二年

所属：オカルト研究部

ポジション：王
キング

備考：邪神（ニヤルラトホテプ）に拉致＋改造されてハイスクールD×Dの世界にトリップした元普通の高校生。

トリップして早々に姫島母娘が襲撃される瞬間に立ち会い、八つ当たり氣味に襲撃者全員を一掃して拉致したニヤルラトホテプを『数え切れぬ負の遺産』で創った能力と武器のオンパレードでボコボコにした（ニヤルラトホテプ曰く邪神でも恐怖を感じる程の狂気と怒りを持つていた）。

姫島家に居候の身として住んでおり、家事や料理のスキルは高い。

アザゼル曰く、チートの塊。

イーヴィル・ピース
悪魔の駒を元に『常識破りな邪神龍の遊び』で創った覚醒の駒で仲間を作つており、レーティングゲームに参加できる様になつている

(魔王の許可が必要。ある兵士とのコンビは禁止されている(四大魔王曰く、リアル無理ゲーになるため))。

原作では下衆だったディオドラの性格を改変させ、親友にさせた事を皮切りに、原作キャラを原作とは違う状態にさせてている(例としてディオドラは性格が改変され、翔悟にやや近い性格になつてている)。自分専用の神器でディオドラと共に並行世界や異世界を巡つており、仲間の大半がその世界の住民である。

性格なのか友好的なドラゴンであるか解らないがやたらと子供に懐かれやすく、魔界に来る度に子供に囮まれる光景を目撃される。
カオス・ブリゲート
禍の団から第一級警戒人物と認識されている。

自分自身の力の危うさと規模を自覚した上でどう使うかを決めており、須弥山の帝釈天、アースガルズのオーデインを中心とした神々からどう成長するか期待されている。

邪神龍參上

あー、どうも初めまして。

元人間、現ドラゴンの呉羽翔悟くれはしょうごとあります。

まあ、ドラゴンになつた原因は・・・

「イダダダダダダダダ!!! ちよ、ちよつと待つてストップつてギャアアアア
アアアアアア!!」

現在進行形でぼっこぼこにしていますが。

つうか、勝手に拉致して改造したのが邪神ならよほどの事がない限り死なないし、もし死んだとしても邪神だから法に捕まらないから平気だろ。

「こわつ、めっちゃ腹黒「ふん!」ブゲウ!?」

色々とうつきから踏んで黙らした。

数十分前までぐぐく普通で充実した学生生活を送つてたのに、こいつのせいでリセットされたからこれぐらいの仕打ちをしても問題ないだろ。

「少しいいかい?」

「あー、ちよつと待つてください。『無限の重火器』ジョンサイド・ジャック!!」

少し前に俺が助けた母娘の夫にと思われる羽を生やした男性に声をかけられた。

俺は少しだけ待つてほしいと言い、『數え切れぬ負の遺産』で創つた怒りを糧とする過負荷マイナスの神器を邪神に向かた。

「く、くくく呉羽さん? そ、その大量の重火器つて・・・」

「死ね」

顔を真っ青にした邪神に対し、死刑宣告と共に銃弾・ミサイル・爆弾の嵐を放つ。

邪神の叫び声を聞いてスッキリしてから男性の方を向いた。

ちなみに発射する前に周囲のダメージを全て押し付ける能力『呪いの藁人形』^{ダメージ・ドレイン・リバース}を使つたので周囲の環境は壊れていない。

「ふう。さて、用件は何ですか？」

「そうだったね。それじゃあ・・・」

話を聞くと、男性の名はバラキエル。俺が助けた母娘は姫島朱璃と姫島朱乃。

俺がよく読んでたライトノベル、『ハイスクールD×D』の登場人物だつたので、俺は『ハイスクールD×D』の世界に拉致されたって事と原作では亡くなつていた朱璃さんを助けていた事がわかつた。

俺は自分自身の事と異世界から拉致された事、この世界が俺の世界ではライトノベルである事を全て話した。

「・・・翔悟君。俺達の家に居候として住んでみないかい？」

「はい？」

バラキエルさんの申し出に一瞬思考が追いつかなかつた。
居候？ え、マジで？

「えーと、いいんですか？」

「ああ、君は信頼できるし、何より朱璃と朱乃を救つてくれたからね」

「・・・」

まあ、考えれば家がないし、人間じやなくなつてるしなあ。
ここは素直に好意に甘えますか。

「わかりました。これからよろしくお願ひします」

「いらっしゃる」

ちなみに体が縮んでいるのを指摘され、確認してら本当だつたので
邪神に螺子をぶつ刺した。

何時もの日常と新たな出会い

どうも、元人間の呉羽翔悟です。

ドラゴンとしての名を考えてみて決めてみました。

名は『混沌の邪神龍（ナイアール・ドラゴン）』。改造した邪神がニヤルラトホテプなので、別表記のナイアーラトテップを参考にしてみたが、意外としつくりしていた。

「翔悟君。お砂糖取ってくれる？」

「はい」

「ありがとう」

今じや姫島家に居候して早二年、あれから襲撃者はすっかり来なくなり、落ち着いた状態になつた。

朱乃（生活しているうちに自然と呼び捨てになつた）も毎日笑顔でいてくれてる。襲撃者をぶつ飛ばしてよかつたなと思える日々だ。
俺は魔力の向上とドラゴンの力のコントロール、神器を使いこなすためのトレーニングをこなしたり、朱璃さんから料理を学んだりして過ごしている。

今日は朱璃さんの得意料理、肉じゃがの作り方を朱乃と共に学んでいる。

「ただいま。いい匂いがしてるね」

「お帰りなさい、あなた」

「お父様、お帰りなさい」

「お疲れです、バラキエルさん」

これがこの世界でのごく普通の日常で、温かい家庭での幸せ。
だからこそこの日常を守りたいといつも思う。

「頑張らないとなあ」

「期待しているよ将来の息子君」

「うえつ?! // /」

「// // /」

「あらあら、一人とも顔が赤いわよ」

この夫婦の突拍子な言葉には耐性ができてないけど。

「さつて、今日もやるか」

神社から遠く離れた場所にある木や草が一切生えてない広場でトレーニングを行う。

龍としてのスペックが高すぎるるので、ほぼ毎日ここで使いこなせるようにしているが、『常識^{カオス}破り^{テイック}な邪神^{ワンド}龍^{ワールド}の遊び』で創った神器のパワーの調整が課題になっている。

バラキエルさんの雷と光を基にした神器『瞬^{ライジング}迅^{ソニック}雷^{ライジング}光^{ソニック}』は送り込む魔力の調整をちゃんとしないと勝手に放電したり、移動時のスピードが出すぎたりする。

今ではまともになってきたが、初めての時は感電したり、結界に突撃して肉片に化したりした。

あらかじめ『数え切れぬ負の遺産』で『大^{オール}嘘^{フィク}憑^{ション}き』を創つておいてよかつたと思う。

『瞬^{ライジング}迅^{ソニック}雷^{ライジング}光^{ソニック}』発動!!』

神器を足に展開する。

『瞬^{ライジング}迅^{ソニック}雷^{ライジング}光^{ソニック}』は全体が黒く、白のラインが走っているローラースケート型の神器。元ネタはサ○デーの天○人の主人公のやつだ。

「GO! つてうおわつ!?」

やつべ、魔力込め過ぎたつて・・・

「見たことねえ場所に来ちまつた」

うーわー、人間じや天国の扉開けてるスピード出しちまつた。
ドラゴンであつて良かつたな。

「ん？ あつちでなんかもめてんのか？」

『・・して』

「あんまよくなない状況だな。ちいとお節介しますか」

声を頼りに移動する事にした。

「白音を放しなさい!!」

「ふん、だつたらおとなしく俺の下僕になりな」

「くつ・・・」

「お姉ちゃん・・・」

なんだろ、一部の映画やドラマの展開な状況。
まあ、助けますか。

「ライトニングキーック！」

「ゲバアアアッ!?」

「!」

「つし、決まつたぜ」

不意打ちとはいえ、見事に決まると清々しいな。

「この、人間風情が俺に「グルアアアアアアア!!!」(ドラゴンの姿(大きさは調整している)になつた)」ど、ドラゴン!?

「ふん、外道のくせにドラゴンに喧嘩売るとは・・・死は覚悟しているか?」

「な、なぜだ!? なぜドラゴンがここに!?!」

「この一人は俺の仲間だ。貴様ごときがどうこうする者ではない(おい、俺にあわせろ)」

「(わかつたにや)もう、遅すぎるにや」

「悪い。さて、俺の仲間を脅迫したんだ。もがき苦しむか、痛みを感じずにある世に逝くか。どちらを選ぶ?」

「・・・・・・」

「ん?」

なんか面倒な予感が・・・

「・・・ヒヒ」

「[?]」

「やべ、狂気に染まりきつてる」

攻撃した時に邪神としての気を中心ちまつたか。

しかも俺に対する恐怖で加速したみたいだし、こいつはもうダメだな。

「ヒヒヒ、ヒヒヤハハハハハハハハハハ!!!」

「[?]」

「はあ、終焉の雷!!」

見るに耐えないので雷を落として殺した。

もし生きていたとしてもまともに生きることは無理だしな。

「悪かつたな。醜いもの見せちまつて」

「にやはは、大丈夫にや」

「わたしも」

一応人の姿に戻る。

さすがにドラゴンのままじゃ色々と不便だし、騒ぎになりかねない
からだ。

「俺は呉羽翔悟。元人間のドラゴンさ」

「私は黒歌。猫又にや」

「白音です。お姉ちゃんと同じ猫又です」

姫島家の次は猫又姉妹か。

また原作ブレイクつてわけかなこりや。

邪神龍と猫又姉妹の旅 その①

「分体解放つと」

「キュイー！」

邪神龍（俺）を見て精神がぶつ壊れた悪魔を殺し、黒歌と白音の自己紹介を済まして3分後。

俺は黒い雷の体の幼龍の分体を出していた。

ドラゴンとしての力を抑えた時に出現する神器もどきは能力をコピーチして改良したものを神器として出現させるものだが、ドラゴンとしての元々の力の一つは『ネロ・カオス』の『獣王の巣』に似たもので、体内から分体を使い魔として召喚できるものだ。

分体が倒されても俺の元に戻るが、体の一部を鉱石などをベースにしたものの場合、落ちた鉱石などはそのまま落ちている。
このことを俺以外で知っているのは姫島家と2、3名の堕天使、黒歌と白音だけだ。

姫島家にも一応数体守護獣として置いてある（バラキエルさんが不在の時にまた襲われないようにするため）。

「姫島家まで飛んでこい」

「キュイー！」

「ほんとに便利にやね、その能力」

「歩くチートの塊と言われてる所以の一つだからな。あと、分体を使つての連絡も可能だ」

使えるようになつたのは1年と2か月前だが、ほんとに便利すぎる。

過去や現代の偉人、開発者とかに喧嘩売つてるようなもんだし。

「んじゃま、移動するか。この場にいてもしかたねえし」「そうね」

「はい」

「ガツハツハツハ!! ヌシが龍とはな! 妖怪として長く生きていたが、ヌシみたいな面白い存在は初めてみたわい!!」

「それはどうも」

「・・・『片角の道元』さんに認められるにやんて。翔悟は凄すぎにや」「・・・うん」

旅の途中、山で豪快な酒呑童子のおつさんと会い、力比べをして勝つたらえらく気に入られた。

おつさんはかなり有名な妖怪らしく、猫又姉妹は俺が勝ったのをみて啞然としていたらしい。今も同じだが。

で、今は酒を飲み、鹿肉や山菜を食べている。

「ワシが負けるのは久々じやが、元々は人間とはのう」

「迷惑極まりないやつにいじくりまわされたのでね。今ではこの事實を受け止めてるし、守りたい者達のために龍の力を使うつもりだ」

「いいのう、実にいい心構えじや。ヌシのような者は久々に見たわい。名はなんじや?」

「吳羽翔悟。邪神の力を持つ龍さ」

「翔悟か。ワシは道元。仲のいいもんからはゲンと呼ばれておる。ぽけつとしとる猫又の姉妹もそう呼んでも構わん」

「にやつ!! は、はい!!」

「・・・」

「まあ、少しずつ慣れていきな」

「そうじやぞ」

それから三日間はゲンさんの手伝い（狩りや幼い妖怪達の遊び相手など）をし、俺達は山を降りた。

ちなみに黒歌と白音は手伝いをしていくうちにゲンさんと普通に話せるようになつた。

邪神龍と猫又姉妹の旅 その②

旅を続けて早20日。

ゲンさんの領域である山を下りて、1週間。
俺達は陰湿な空気が漂う古びた屋敷に着いた。

「・・・（血？ いや、この臭いは別の何かか？）」

屋敷に着いた途端に血に近い変わった臭いが嗅覚を刺激した。
明らかに何かがあると思わせるほどに。

「どうしたのにや？」

「二人は何か変わった臭いを感じないか？」

「？ 全然にや」

「私もです」

「そうか。じゃあ、この中に変わったナニかがいるのか？」

思つたことを口にすると、殉職者の服装をきた青年とアルビノらしいオオカミが屋敷の玄関から出てきた。

「ナニかではないんですけどね」

「オン！」

「エクソシストか・・・」

「はぐれ悪魔や度が過ぎた魔物等を討伐するのが仕事ですけどね。今の状態では違いますが・・・」

「と言うと？」

「僕達は特殊な結界に閉じ込められたみたいなんですよ」

「なるほどな。この変わった臭いも結界の魔力つてわけか」

「にや？ どういう意味？」

「さつきの質問で変わった臭いを感じないかと言つただろ。屋敷に着いた時点で結界の中に閉じ込められたんだ」

「兄さんが感じた臭いってこの結界に維持するために使われている魔力だつたんだね」

「ああ。 そうなるな」

しかし、どうやってここから出るかだ。

ヘタに神器を使うのは得策じやないし……。

「この結界を張っている者を倒すしかないね。おそらく、この屋敷のどこかにいるはずですよ」

「だけど、普通に探しても時間がかかるし、体力が持つかにや？」

黒歌の意見はもつともだ。

普通に探しても時間と体力を無駄に浪費してしまう。

『それなら私にお任せください！』

ん？ なんかどつかで聞いた声が。

「こちらです、御三人」

声の方向に顔を向けると、蠟燭をもつた執事みたいな小さい幽霊がいた。

「にゃ？ 幽霊？」

「…かわいい」

「私、この屋敷の執事を務めておりましたセバスチャンと申します。ランスロット様とジャック様にこの屋敷に住みついている悪いゴーストの浄化をさせてもらつてたのですが…。何分數が多くすぎて」「このコンビでも対処しづらくなつて一時撤退つてわけか」「おっしゃるとおりです」

「さすがに2対3500000は無理だよ」

「その数つて雑魚のチビゴーストの群れか？」

「いや、ボクシング選手みたいなタイプと炎の塊みたいなタイプの群れだつたよ」

ストロン・ブーとファイ・ブーかよ。

特にファイ・ブーは物理が効かねえし、氷系は持つてねえぞ。

「チツ、めんどくせえのが混じつてんのか

「翔悟はなにか知つてるにや？」

「まあな。炎の塊みたいのは【ファイ・ブー】つてゴーストで物理技が一切効かねえ。あと、ボクシング選手みたいのは【ストロン・ブー】。攻撃が他のゴーストより上のゴーストさ」

「なるほどね。他にもそろいつたゴーストはいるのかな？」

「氷を纏つたゴーストの【サ・ブー】と厚い脂肪を持つゴーストの【デブー】以外なら普通の攻撃で十分倒せるな。【サ・ブー】には炎系、【ファイ・ブー】には氷系の術とかあれば倒せるが、あいにく持つていんだよな」

「さすがにそれらの術はないですね」

「私達もないにや」

「氷と炎なら屋敷のなかに魔術の砲台があつたはずです！」

「なら【ファイ・ブー】と【サ・ブー】は砲台を見つけるまで戦闘は控えて、ほかのゴーストは倒していくつてやり方でいいか？」

「問題ないよ。今はこれが最善の策だとと思うからね」

「オッケーにや」

「はい」

「オン」

一応方針は決まつたな。

攻撃的なゴーストが集団で襲いかかるとかがない限り大丈夫なんだが。

『ブモオオオオオオ!!!!』

「重・・・！」

大砲を探してゐる途中、元は人形のミノタウロスとエンカウントした。

入口でフラグを立てたかもしぬないなこりや。

「こいつは俺が倒しておくから、みんなは大砲を見つけといてくれ！」
「わかった。呉羽君も氣をつけて！」

こいつを動かしてゐる魔力、どうも嫌な感じがする。

人の感情をそのまま魔力に反映さしてゐみたいだな。

「術者が人間かは悪靈の類か知らねえが、ぶつ飛ばしてもらうぜ！」

半龍（龍人）化してミノタウロスの頸をアツパーで打ち上げる。
パワーが人間の時より遥かに強化されてゐたので、ミノタウロスは
ぶつ飛び、床に落ちた後、元の姿らしき人形に戻った。

「ほんつとチートだよな、俺」

軽く自分自身の能力の高さに呆れてゐると、背後の気配を察知し、
振り返る。

「ミノタウロスを一瞬で倒すなんて、お兄ちゃんはスゴイね」

そこには見た目は純粹無垢だが、裏にとんでもない闇を隠してゐる
ような笑顔を浮かべた少女がいた。

邪神龍と猫又姉妹の旅 その③

「お兄ちゃんはスゴイね」

「（ミノタウロスを操つてた術者か・・・。過負荷側っぽいが、操られているみたいだな。）一つ聞くが、お前は何者だ？」

「アハハ。私はリネットだよ。お兄ちゃんは何て言うの？」

「呉羽翔悟」

「翔悟お兄ちゃんか・・・。ねえ、お兄ちゃん。私と遊ぼう」

「（殺氣。こいつ殺る気だな）いいぜ。遊んでやる」

「アハハハハハ!! いくよ! 殺戮^{マサカ一・パペツト・ショータイム}と呪いの人形劇!!」

リネットが両手を左右に振るとさつき倒したミノタウロスと同じ雰囲気の元々は人形のモンスターが13体現れた。

「これが私の神器、殺戮^{マサカ一・パペツト・ショータイム}と呪いの人形劇!! さすがのお兄ちゃんも1対13は無理でしょ!!」

そう言うと同時にモンスターが襲い掛かる。

「アハハハハハハ!! 死んじゃえー!!」

「オラアツ!!』《ドゴゴゴゴゴゴツ!!!》

『ギャアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

「.....え?」

今の流れを簡潔に説明すると…

モンスターが俺に襲い掛かる。

←

半龍モードなので、人間時より動体視力と身体能力が遥かに強化されているのでモンスターの動きが止まつて見える。

←

一気に加速して一体ずつ殴り飛ばしてもといった位置にもどる。

←

リネット茫然。

つてわけだ。

チートの塊と言われた俺ならこれぐらいは余裕だ。

「え？　え？　な、なんで…？」

「遅すぎ。俺に一撃入れたいなら神の武器を用意しな。もつとも、亞音速くらいのスピードはほしいがな」

「う、うううううううううう

「ありや、涙目だ。

勝利を確信したと思つたら撃退されてダメだしだもんな。プライドを打ち碎いちまつたか。

「で、どうすんだ？　言つておくが、この半龍時でも本氣の半分ぐらいの力があるし、俺には無限とほぼ変わらない数の神器や武器を所持しているからな」

「…勝てない（ズーーーーン）」

「翔悟ー、大丈夫にや、つて何この状況？」

あ、黒歌達が戻ってきたか。

こいつ（リネット）は尻尾で捕縛すつか。

「フムツ？　ムムムー————!!？」

俺の龍としての尻尾というより体全体は色々な物に変化できるので、ご都合主義な物質にも変化可能だ。

今回は尻尾を伸縮自在、斬れず痛覚はない上に大きさを変える」とができるものにした。チート万歳だ。

「んじやま、特殊ゴースト達の討伐といきますか」

『オーーーーーーーー!!』

「ムーーーーーーーー!!!!」

約一名がうるさいが無視だ。

「メガトンパンチ！ フアイアーアー・ブレス！ アイス・キャノン！」

「ハアツ！」

「ガウツ！」

「食らうにやつ！」

「そこつ！」

ファイブーやサ・ブー等、特殊なゴーストは俺が担当し、残りのゴーストは黒歌達が担当して屋敷内を探索していく。

大砲は体内に取り込んで俺の能力の一つにしておいた。車輪はあるけど結構重いのでこうした方が楽なのだ。
そんなこんなで進んで行くと――

「…………」

異様な魔力を持つ三つ目のゴスロリ少女がいた。
禍々しい魔力の中に別の魔力がある。

おそらく、「マスター・ブー」に操られてるな。

「セバスチャン。あの子は……」

「ワタシがお使いしていたお嬢様です。しかし、なぜ悪いゴースト達の方に…」

「あのお嬢様の魔力に別の魔力があつた。多分、黒幕の駒として操ら

れてるな

「そんな!?」

「気をつけて！ 何か仕掛けてくるよ!!」

「「「！」」」

「殺れ！」

『グオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

『H A H A H A H A H A !』

お嬢様が原作と同じ人形を二つ取出し、叩きつけるとフランケンとドラキュラが姿を現す。

リネットの時とは魔力の量が違う。こつちの方に魔力を注ぎ込んだようだ。

現にあれほどムームー唸つてたリネットがクタツと力が抜けてい

る。

「フランケンは俺がやる！ みんなはドラキュラの方を頼む！」

『了解！』

「(セバスチャン)」

フランケンに殴り掛けながらセバスチャンに念話をする。

コレはゲンさんの山に住んでいた一風変わった妖怪から教えて貰つた能力だ。

「(なんでしょうか?)」

「(俺の分体をいくつか出すから、あのフランケンに電気を送つている機械を見つけて壊してくれ)」

「(やはり、あの怪物には機械が混じっているのですね)」

「(元々は人形とはいえ、アイツは人造人間みたいなもんだからな。俺が応戦して弱らせておくから機械の方を頼む)」

「(わかりました。お気をつけて)」

「(ああ) さあて、邪神龍の狂氣的な娯楽の始まりだ!!」

ある程度は耐えろよな、ポンコツ。

邪神龍と猫又姉妹の旅 その④

ランスロット視点

『H A H A H A H A H A H A H A !!!』

「クツ、4対1でも厳しいとはね。あの子を操っている黒幕の魔力がスゴイのかあの子自体の魔力がスゴイのか分からぬけど「そんなのはどうでもいいにゃ!!」

「喋る余裕はありません！」

「ガウガウッ!!」

だよね。

僕も切り札を使つてもなお不利だし。
どうしようかなと思つてると、魔法でできた球体が迫つてきてたので跳ね返す事にした。

「おつと、お返しだ！」

『（ドカン！）NO！』

「効いた？」

「分かつたにゃ！　あいつは自分の魔力に弱いんだにゃ！」

「それならカウンター重視でいこう！　僕が跳ね返すから分裂したところを狙つて！」

「なんでにゃ？」

「吸血鬼は複数の蝙蝠に分裂する能力を持つてゐるんだ。あの人形もその能力を持つてゐるなら分裂した時に偽物と本物に分裂するはず…。その時に本物を攻撃すればいつか倒せるはずだ!!」

人形が分裂するタイミングは僕達には分からぬ。
多分、攻撃を跳ね返して続ければいいはずだ。

「僕達が勝つには今的方法しかない。あの子を救う為にも絶対勝とう

!!

「あつたりまえにや！」

「はい！」

「オン！」

『H A A A A A A A A A A !!』

「ここからが正念場なんだ！
勝たせてもらうよ！」

「ほらほら。立つてみろよ、ポンコツ」
『ガ……ガガ……ガ』

半龍モードのままだつたから一方的なジエノサイドゲームみたくなつていてるが、フランケンは未だに倒せていない。
やはり電気エネルギーの供給を止めない限り人形に戻らないようだ。

『ガアアアアアアアアアアアアア!!!!』
「(ガンツ!) イダアツ!?!?」

「考え過ぎて防御が疎かになつちまつたな。
鉄骨が地味に痛い。」

「はーあ、邪神の力を持つても強いとかそういうもんじやねーもんな。
鍛えていても真の最強には遠すぎるものだな」

さて、セバスチャンとみんなはどうなつてんやら。

セバスチャン視点

「翔悟様の予想通りでしたか……」

『排除スル。排除スル』

発電機の場所にたどり着きましたが、発電機そのものが機械の蜘蛛の姿をした魔物でした。

この事を危惧でいたでしょう、私と共に行動した翔悟様の分体が威嚇しています。

『排除！』

「うわあっ！」

電撃を放つてきましたのすぐに回避しましたが、私がいた場所には大きな穴が開いていました。

もし当たっていたなら消滅は免れませんね。

『(くいくい)』

「どうかしましたか？」

『クエー』

「指示、ですか？ 私でよろしいのですか？」

『クエッ！』

その目は翔悟様と同じ強いものです。

お嬢様を救う者の中に私が必ず入つていると示唆しているみたいですね。

「分かりました。このセバスチャン、貴方方をサポートさせてもらいます」

絶対勝ちましょう。

お嬢様を、皆を助けるために。

ランスロット視点

『N U, N U U u u u u u』

戦いを初めて大分経つて弱らせてきたけど、こつちも疲労とダメージが積み重なつてしまつた。

エクソシストとしての仕事の方がまだマシと思えたのは初めてだよ。

「無毀^{アロンド}たる湖光！」

魔剣としての属性を持った宝具の真名を解放する。
これ以上は時間を掛けるわけにはいかないからね。

「これで、終わらせる!!」

『D e a d E n d!!』

互いに攻撃を繰り出す。宝具からでた光とドラキュラの魔法がぶつかりあい：

『W h a t!?』

光が魔法^ごとドラキュラを飲み込んで消えた。

警戒しつつその場を見ると、人形の形をした灰らしい物が崩れていた。

「……はは、やつと終わった（バタン）」

宝具を使ったのと今までの疲労感があふれ、床に倒れる。皆も同じみたいで呼吸が若干荒い。

「キツ…過ぎ……にや」

「…動くのが、辛い、です」

「ガウ……」

呉羽君達はどうなつてゐるかな。

多分心配する必要はあまりないと思うけど。

セバスチャン視点

『排除スル！ 排除スル!!』

「電撃を回避したら右側の真ん中の足に攻撃してください!! イーグルさん！ ミサイルが追尾しています！」

翔悟様の分体（鷹・狼・空を飛ぶ鱗の3種類）に指示しながら敵の魔物の様子を見ていますが、あの魔物は古いゴーレムと同じようにコアが埋め込まれていています。

体が機械など何かしらの物質でできた魔物でも一定のダメージを負えば死に至るのですから。

『!? クエーツ!!』

「え？ うわーっ!?」

イーグルさんの鳴き声で電撃に気付いて避けたのはいいですけど、床に穴が開き、その周りが灰と炭になつていきました。

もし気づかなかつたらこの世から消滅していたかもしれません。

「助かりました。オルカさん（鰐型のこと）、胴体に一回だけ攻撃してください！」

『シャアアアアツ！（ガキツ）』

オルカさんが牙で抉った所に赤い球体がありました。おそらく、アレがあの魔物のコアみたいですね。

『排除排除排除オオオオオオオツ!!!』

「うわああああああ！もうなりふり構つてられない状態になつてますうううう！」

『オオン！』

ガキイン！

『は…………い…………じょ…………』

ノイズが混ざつたような機械じみた断末魔を出して魔物が崩れ落ちました。

「お、終わつた……みたいですね」

『ガウ』『クエツ』『シャアア』

「早く合流しましょう。翔悟様は問題ないでしようけど、他の皆様方が心配です」

「なんか軽く失礼なこと考えられた氣がする」

『ゴ……ガ、ガピ』

「まあ、現在進行形で超虐殺タイムだよな。死んでないけど」

目の前に転がっているフランケンだった物体を見下ろす。
半龍モードで何百回も殴る蹴るを繰り返してきたものだから8割
方鉄屑になつてゐる。

『…………（ブシュウウウウ）』

「お、死んだな。つうことはセバスチャン達が上手く倒したか」

「うひやひやひやひや。随分と目障りだなあ、邪神龍!!」

「随分と遅いご登場だな、【マスター・ブー】さんよ」

耳障りな笑い方と声音に反応して振り向くと、元人間の魔法使いで現悪のゴースト達の長、【マスター・ブー】がいた。

邪神龍と猫又姉妹の旅 その⑤

セバスチャン視点

「皆さん、無事ですか??」

「セバスチャン。僕達は大丈夫だよ。お嬢様もね」

「セバスチャン!! 無事でよかつた…」

「それはこちらもです。あれ、翔悟様は?」

「わからない。あのフランケンを倒したのは確実だと思うけど……」

「そう言えば翔悟が縛っていた女の子もいないにや」

「まさか、「マスター・ブー」が……!」

「お嬢様。翔悟様は問題ありません。彼は強さと優しさを持った頼もしいお方ですから」

「……兄さんはそちらの悪党には負けません。むしろ返り討ちにします」

「多分今頃キレてるんじゃないかなにや? 翔悟って命をただの道具扱いするのが一番嫌いだつて言つてたことがあるし」

キレた翔悟様は「マスター・ブー」にはトラウマとして魂に刻まれますね。

分体の方達でも相当の実力を持つていましたので、本体である翔悟様の実力はとんでもないでしよう。

……「マスター・ブー」が憐れに思えてきました。

「私達は兄さんが帰つてくるのを待つだけです」

「オン」

「…………ふふつ、 そうですね」

お嬢様は私達の翔悟様を信じている態度を見て安心したようで、笑顔になりました。

翔悟様、後はお願ひします。

アアアアアアアアアアアアアア
フオーリルダウン・デッ

「チイツ！狂気へ誘う歪な魔声」!!

端も天井も見えない屋敷の部屋を模した空間内で俺は黒幕の「マスター・ブー」と対峙していた。

「ハハハ」「！」が呑んでる這いへくはりてくる人たるうるせのどもを特殊な咆哮で吹き飛ばす。

い。 かかはる。 仕事で、 いざこまへる。

「げひや、いくら力を持つたとしても当たらなければどうつてことはない。それに、貴様はドラゴンとしては一級ものだけどよお、人としての肉体は追いついているかなあ。げひやひやひやひや！」

【マスター・ブー】の言い分はもつともだ。

ただでさえリネットを傷つけないように戦うというハンデを背負っている上に人間としての肉体年齢はまだ8歳。体力は結構厳しい状態になつていて、

「それでも……俺はテメエみたいなクズには負けるつもりはねえんだよ!! グオオオ、ガアアアアア!!! （ゴオオオオッ!!!）」

「何つ!? (ジユウツ) イツ、ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!!! 腕がつ!! 腕

腕がつ!!

ブレスで化物諸共アイツの左腕を蒸発してやつた。
左腕があつた部分は焼け爛れていて再生することはないとと思う。

「どうだ……一発ぶちかましてやつたぜ」

何だ今のは？

リネットは尻尾を変化させて作った特殊なドームで傷はつかなかつたが、アバラを数本持つてかれたみたいだな。

「クキ、クケケケケケケケ!!! これだ。この力があればオレはグヒヤ
ヒヤヒヤヒヤ!!」

起き上がり正面を見ると、「マスター・ブー」はさつきまでの人には近いゴーストのような姿ではなく、常人ならS A N値が消し飛んで狂うような異形の怪物に成り果てていた。

大きさは50m強、体全体が泡が集まつたかのように凹凸になつていて一部には人や動物等の顔や胴体等が浮き上がりつていて時々変な液体や臓器らしきものを吐いている。

「も顔だけでなくあちこちにできており 声色もハラハラだ
さつきのブレスをくらつた時にどうにか取り込んだらしいが、体は
対応しきれなかつたと思う。」

リネットが気を失っている状態でほんとよかつた。

「欲と禁忌に溺れた結果が醜すぎる化物なんて笑えるな」

「人語すらまともに喋れなくなつたのか。なんどうか憐れに見える

「

映画とかで自分の欲・殺意とかで変貌した人間が色々とでたけど、こいつだけはゴーストになつてもそれに対する執念か何かがあります。ほつとけば狂気に思考も魂も飲まれて自我のない怪物に成り果てる……。が、それだけは何の解決にはならない。

この3流以下の劇場の幕を降ろすしかゴースト達も異形の怪物の魂を救うことはできないもんな。

「はあ。つたく、お人よしつてのはどうしようもねえな。こんなクズを救おうなんて考えちまう」

折れたアバラの部分を上手く変化させて元の状態に戻し、深呼吸する。

一発本気を出すか。

「オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　ツ　!!
（バ　サアツ）
『始まりの混沌と終演の現世からの解放』!!!

ドラゴンに姿を変え、羽で「マスター・ブー」を覆う。
全ての原初とも言える混沌の体質と數え切れぬ負の遺産を合わせて使^{カオス}う^ガご^{ティ}都^ブ合^{クリ}主^{エイ}義^トとチ^クー^リト全^ク開^クの能^ハ力^イ、『始まりの混沌と終演の現世からの解放』。これは対象の命・魂に干渉して新たな生命に生まれ変わらせたり想像を絶する死に方をさせたりできるものだ。

今回は狂気に染まつた部分を取り除き、来世に魂を送るやり方を選ぶ。

理由はこいつの魂に干渉した時、過去を見たのだからだ。

【マスター・ブー】は、ゴーストになる以前はごく普通の人間で平和に暮らしていた男だつた。だが、戦争が勃発した後、宗教などの違いで異端者とされ、拷問された挙句、家族を目の前で殺され、復讐として禁忌の術に手をだした。

結果として復讐は果たせたが虚無に近い忘失を覚え、自分自身が何者なのか忘れてしまい、処刑される日が来るまで多くの生命を亡き者にしていた。

これが【マスター・ブー】の過去。彼を支える存在が消された故に狂つてしまつた生前だ。

俺も狂氣と矛盾、混沌を司る龍だから何かしらの切つ掛けでああな
るかもしないと考えると恐ろしくなる。

「来世では良い人生を歩めるといいな。『　　』さんよ」

『マスター・ブー』の生前の名を言い、翼を戻す。

化物がいた場所には光る球体が浮遊していて少し経つと球体が消
えた。

「チート能力持ちも楽しじやないな」

空間が歪み、フランケンを蹂躪していた場所に戻る。

そこには黒歌・白音・ランスロット・ジャック・セバスチャン・セ
バスチャンが仕えているお嬢様がいた。

「翔悟（兄さん）、お帰りにや（お帰りなさい）」

『マスター・ブー』を倒したみたいだね』

「オン！」

生きている3人と1匹がこっちに駆けより、セバスチャンとお嬢様
は頭を下げていた。

「（）迷惑をお掛けして本当に申し訳ありません。それと、仲間達を助
けていただいた御恩は決して忘れません」

「これで、私達もあの世に逝けます」

「そういうや二人は生きている者じゃなかつたもんな」

「はい。皆様にはお礼とお詫びとしてこれを受け取つてください」

お嬢様は本来持つていたらしい魔力を集めて木箱を召喚して俺達
に渡した。

中身は宝石なのだが、護りに特化した魔力が込められている。

「これは『守護の石』だね。普通は魔力の波長と合つた者でしか効果を発揮できないけど、護りの力は神滅具ロングギヌスでも破ることはできないって伝承があるよ。それが実物で見ることになるとは思わなかつたけど……」

「まじか!? というか良いのか、そんな貴重な物を俺達に渡すのは」「翔悟さんが言つた通り、私達は本来この世に留まつてはいけないのです。ですからこれらは貴方達が持つてくださいれば安心できます」「…………ふう、そうかい。だつたらありがたく受け取るぜ」「ありがとうございます。ではさようなら」

お嬢様とセバスチヤンは笑顔で消えていき、屋敷は完全な廃屋となつた。



「僕達はあつちだからここでお別れだね」「だな」

屋敷から出て暫く歩き、三叉路に着いた後、俺達はランスロット、ジヤツクと別れることになつた。

俺達は分体の出す魔力を頼りに姫島家に戻るが、エクソシストの1人と1匹は仕事があるらしい。

「リネットちゃんだけ? 彼女はどうするの?」

「一応俺の義妹にしようと思う。両親に捨てられたかは分からんけどな」

リネットは『マスター・ブー』に魔力をごつそり持つてかれたのでまったく動けない+眠つて いる状態なので、俺がおんぶして いる。彼女だけは神器を所持している人間だったので俺が引き取つてい

るのだ。

「私と白音は姫島家に居候しようと思つてゐるにや」

「兄さんがお世話になつてゐる人達なら安心できますし」

「そうなんだ。それじや、またいつか会おうね」

「「おう（ええ）（はい）」」

お互に笑いあつてそれぞれの道を進む。

あの屋敷での戦闘を体験した俺達の首には『守護の石』のペンダン
トが光っていた。

オリキヤラ紹介 その①

名前：道元

性別：男

年齢：約1000

種族：酒呑童子

容姿：普段は左目に切り傷がある赤い短髪の偉丈夫。妖怪としての姿は体格がそう変わらないが、着流しはどつちの姿でも着ている。

身長：250cm

性格：豪快かつさっぱりとしたもの。

所属：とある山の隠れ里（人間と妖怪が共存している）

備考：翔悟が猫又姉妹と姫島家に戻る途中で来た里の長である妖怪。

里に住む全ての妖怪と人間の親父的な存在で本人に自覚はないが、カリスマがある。

酒呑童子故に酒が好き（この作品では鬼の妖怪全て）だが、どちらかと言うと里の住人と祝事（祭など）が好きである。

翔悟とは交流が続いており、夏休みに翔悟が羊羹やところてん等を持つてくるのが里で毎年の恒例となっている。

名前：ランスロット

性別：男

年齢：17（初登場時）→26（本編開始時）

種族：人間

容姿：紅色の髪と藍色の瞳。首に『守護の石』のペンダントを提げている。

身長：179cm

性格：思慮深く、落ちついている。パニックに陥った事は一度もない。

宝具：『無毀たる湖光』（『湖の騎士 ランスロット』が持っていたと云われる剣。この作品では魔剣の属性を持った宝具であり、聖剣とし

ての力はやや低い。真名を解放する事で某型月の騎士王の宝具と同レベルの斬撃を放つ事ができる)

所属：元教会（『聖剣計画』の主導者である『ハルバー・ガリレイ』の抹殺及び、教会の異常とも言える信仰っぷりに嫌気がさしたため）

↓私立駒王学園

ポジション：騎士^{ナイト}（翔悟の仲間）

備考：翔悟と黒歌、白音が姫島家に戻る途中に会った湖の騎士ラン

スロットの子孫であるエクソシスト。

相棒のジャック（アルビノな色合いの狼）と共に度が過ぎた行動をしている妖怪や墮天使、はぐれ悪魔を腕っ節で沈めたり、（かなり稀に）抹殺していた。

グリゼルダとは同期であり、ゼノヴィアとも交流があった。

エクソシストとしての実力は高く、最強に最も近い者と評されている（本人は否定している）。

悪魔は全て滅する存在と見ておらず、ちゃんとした意志を持つたりアス達に好印象を持つている。

学園内では木場と負けず劣らずの人気を誇る。

翔悟のチートっぷりに一切同様しない人物の一人。

名前：ジャック

性別：雄

年齢：不明（ランスロット曰く、かなり長生きしている）

種族：狼（普通ではない）

容姿：アルビノと同じ色の目と毛。

大きさ：体長約1・9m。高さは1m

性格：忠義を貫く、男らしい性格。

所属：元教会（ランスロットについて行つた為）。私立駒王学園

ポジション：兵士^{ボーン}（翔悟の仲間）

備考：ランスロットと共に行動している狼。

教会に所属していた頃は常時ランスロットと行動していた。

狼としては異様なまでに能力が高く、牙で剣を圧し折つたり、一度

吼えると敵対する悪魔などが腰を抜かす（人形のヴァンパイアには効かなかつた）など狼の姿をした何かではないかと噂されていた。

駒王学園では番犬ならぬ番狼となつてている。

ランスロット以外ではリネットや黒歌、白音と翔悟に一番懐いており、松田と元浜には軽蔑の視線を向ける程嫌つてゐる。

名前：呉羽リネット

性別：女

年齢：7（初登場時）→16（原作開始時）

種族：人間

容姿：若草色の腰まで届く髪と瞳。ポヤつとした雰囲気が似合う顔付き。

身長：157cm

性格：見た目とは裏腹にリアリストで死体を見ても物怖じしない。何気に娯楽好きでSツツ氣があるが、兄譲りの面倒見の良さを持つている。

神器：『殺戮と呪いの人形劇』（人形やぬいぐるみを自在に操つたり

モンスターに変える神器。モンスターのステータスは所有者であるリネットの魔力によつて決まるので、長期戦にはそれほど向いていない。モンスター化した人形とぬいぐるみは何時でも元に戻す事が出来る）

学年：私立駒王学園一年

所属：オカルト研究部

ポジション：僧侶（翔悟の仲間（家族）
ビショップ

備考：翔悟がマスター・ブーに乗つ取られた屋敷で会つた少女。当初はマスター・ブーに操られて駒になつていたがマスター・ブーがこの世から消えた後、翔悟の義理の妹になつた。

兄と姉達（黒歌と朱乃）に負けず劣らずの料理スキルを持つており、肉じゃがと味噌汁以外は朱璃と同等の腕前。

翔悟が引き起こすご都合主義全開な行動を大いに煽る癖があり、敵から見れば核爆弾よりもタチが悪い存在である。

魔力が高く、異世界の魔法を多く取得している為、兄と同じくとある仲間の兵士とはレーティングゲームでコンビ及びチームを組む事を禁じられている（翔悟よりマシだが、やはりリアル無理ゲーになってしまうため）。

白音がマスコット的存在ならりネットは一年のご意見番である（理由は性格）。

邪神龍と猫又姉妹の旅 その⑥

「主が主なら眷属も眷属か」

「なんとなく何があつたのか解つたけど、お兄ちゃん鬼畜かつ暴君つぽい殺し方するよね」

「翔悟。早くそれ消して。白音には見せたくないから」

黒歌が言うそれは黒歌と白音を助けた時に雷で消滅させた悪魔の眷属の死体だ。

姫島家まであと数kmつてところでどうやつたか俺のことを色々調べて『主人の仇だ』とか言つて襲い掛かつたので返り討ちにした。かなりえげつない殺し方で。

そのため完全にモザイクをかけないといけない死体が積みあがつた。黒歌は白音の目を隠しているが、死体をみているため、死体の消失を頼んでいる（リネットは俺の殺し方に引くだけで死体に関しては普通に見てている）。

「それはもつともだな。（ゴオオツ↑（プレスの音））で、そこで隠れるのはいい加減出てきたらどうだ？」

「「えつ？」」

チート能力というか体质で気づいたが、死体ができるまでにこつちを観察するような視線が少し離れた木から向けられていた。指摘すると、フードを被つた胡散臭い雰囲気が合う者が木陰から出てくる。

「兄ちゃん中々鋭いな。気配は結構隠してたつもりなんやけど」「殺意に満ちた視線に交じつて観察する視線は不自然すぎるつての。キモいし」

「おおいつ！ 初つ端からキモいつて何やねん！」

「私もお兄ちゃんと同じく」

「兄妹で嫌な連携すんなや！！ はあ、会つてたつた一分で弄られるど

は思わんかった

「それよりあなた誰にや？」

「おお！ 忘れとつた！ ワイは黒木良哉。一応あの下種の元眷属セイゲリット・ギアだつた転生悪魔や。ちなみに神 器 持ちやで」

「関西弁とはまたキヤラが立つてゐるな。で、お前の目的は何だ？」

態々物陰に隠れて観察してた奴だ。そう思い変な事を企んでいたら殺すつもりで構えると、黒木は青褪めて後退した。

「いやいやそんな物騒なもんを出す構えをしなくてもええやん!? 確かにあいつらけしかけたのはワイだけど、あいつらのやり方に嫌気がさしてたから下種をぶつ殺した兄ちゃんに他のも殺つてもらいたかつてん!!」

「やつぱりああいう奴だつたね……」

「塵にして正解だつたか。一つ訊くが、お前の神器は千里眼みたいなものか？」

「近いようでちよいと違う。ワイの神器、『人生日記ミスティック・ノート』は周囲の人間かワイ自身の未来や過去をノートに写す能力を持つてるんや。それでの下種がどうやつて死んだか、その時周囲に誰がいたかが解つてただけつちゆうわけ」

「○来○記じやねえか」

「〔〔未○日○?〕〕」

「いや俺だけしか知らないもんだから気にするな」

元いた世界の事は後で黒歌達に話すか。バラキエルさん達にも話したし。

「構えた方がええな。あいつら最後の悪足掻きをしておるで」

黒木が俺達の後ろを見て顔を険しくする。振り返れば、真っ黒な何かが蠢いていた。

「確かに。俺に対する怨みと塵になつた体で魔獣を造つてやがる」

「……気持ち悪い」

「何にやのあれ？」

「死靈術ネクロマンシーと黒魔術の組み合わせだね。この感じ、大きいのが来るよ！」

『ギュアアアアアアアアツ!!!!』

俺が殺した悪魔達は腐敗したドラゴンとなつて吼えた。その目には怨恨・憤怒・復讐・狂気に満ちている。

「理性は欠片もないってか？　俺を殺したければ殺してみな。ただし、殺されるのも考慮する脳があればの話だがな」

『ギュアアアアアアツ！』

「遅いって『ドゴォン！』ウゲツ!?」

「〔（ニヤツ／エツ／うおつ）！?〕」

咆哮とともに振り下ろされた右前足を避ける。足が当たつた地面は大きく穿てられ、一気に腐っていく。俺達が驚愕する中、リネットだけが冷静だつた。

「この腐敗……。死靈術で禁忌に入るものだよ」

「どういうこと？」

「普通、死靈術は予め死体や臓器等を用意して使うんだけどあくまで使えるのは魔術師か魔力の高い人間のものと竜の骨ぐらいなの。それに死靈術を使うのに効率がいいのは戦場跡や墓地とか死が多い場所。ここは普通の山道に加えて神社があるから効率が悪い。だから普通なら死靈術は殆ど使えないの」

「だけどあの地面は腐っているにや」

「だから禁忌って言つたの。死靈術で禁忌の存在となつている死を加速させるものがあるの。あいつ等は自分達の死とお兄ちゃん狂気を

利用してそれを引き出したとしか考えられない」

「根本的な原因は俺かよ……」

マスター・ブーの二の舞だなと思いつつもゾンビの竜を見据える。（あいつらの襲撃を受けた時から張られている）結界があるので一般人はこの場所に来れないから良いとして、問題は死を加速させる術と相手が『死』そのものである事だ。一応『大_{オール}嘘_{ファイク}憑_{ション}』があるから死ぬのは免れるとして、良哉以外は全員10歳以下だから長期戦は不利。故に短期決戦が有効と思うが、『死』をどうやって滅するかが重要だ。『始まりの混沌_{スデイ}と終焉_{エンド}の現世からの解放_{デイ}』は全力の状態でしか発動出来ない上に巻族が隠蔽の為に張つただけの結界が耐えきられる保障がない。

「次、来るで！ 今度は触手っぽいのや。あれもあいつの足と同じ術を得てているで!!」

良哉の言うとおり、ゾンビの背中から触手らしきウネウネしたもののが8本出て俺目掛けて襲いかかる。黒歌達は眼中に無いのか俺に攻撃が集中されているようだ。

「チツ、俺だけが狙いみたいだな」

「兄ちゃん、悪いが十分だけ時間稼いでくれへんか？」

「何だよつ！ 『ドゴン！』 ウオワツッ！」

「ワイに秘策があるんや。だけどな、その秘策となる神器は発動するのに時間が掛かるねん」

「そうかよ！ だつたらとことん稼いでやるぜ！」

半龍モードになり、マスター・ブーの記憶から創った神器を発動させる。死そのものには生も死もないものだ。

『感情なき混沌の眷属_{ノーエイジ・マーサナリィ}』！

影や地面から陶器で出来た大人とほぼ同じ姿の駒が多数現れる。こいつらは自立起動で敵に攻撃したり護りに徹したりと戦闘面では大いに役立つ。

「それじゃ、私も『殺戮と呪いの人形劇』!!
マサカーパペツト・ショータイム

「うにゃ…。私達は補助に回るにや」

「……ですね」

「すまへんな、皆。んじやま、行きまっせ！『封魔龍の鎧脚』!!
チエインズ・アルマトウラ・レガース

良哉が発動した宝玉が鎧の足の部分に似た神器。それにはドラゴンの力が宿っていると俺は確信した。そして、脛部分にはめ込められている宝玉から淡々とした女子の声が聞こえた。

『良哉。敵？』

「そんなどこや。死そのものなんやけど、封印出来そうか？」

『可能。十分必要』

「え、神滅具？」
ロンギヌス

「何にやの、そのロンギヌスって？」

「神を殺す事が可能な神器つて事だ。『ブオーン！』つと、てか封魔龍つて聞いたことないが『ドドドドドド!!!』のわあつ!?」

段々とゾンビの攻撃の隙が出来るのが減つていき、視線を向ける暇がなくなつていく。回避し、駒をぶつけていると白音が呆れが混じつた声を出した。

「兄さん、器用すぎです。それで封魔龍とはどんなドラゴンなのですか？」

『嬢ちゃんも嬢ちゃんやな。（汗）封魔龍はミゲルの肩書きや。
エンシェント・ズィーゲル・ドラゴン
賢者たる封魔龍』つちゅうて、ミゲルは魔法や能力、敵を封印する力を持つておるんやで』

『混沌龍。封印。不可能』

「……あの兄ちゃんと一部のドラゴンは例外やけどな」

「流石は翔悟にや。歩くチートは伊達じゃないにや」

「のんきに会話しないでよー!! こつちは大変なんだからあつ!!!」

リネットが外野の会話にツッコミを入れる。リネットはいいが俺はこ俺で手一杯な状態だ。何せゾンビの猛攻が某奇妙な冒険の主人公が放つラッシュと変わりなくなつたので、身体を液状にしたり、影に潜り込んだりして回避している。リネットはモンスターを特攻させることを諦めて距離を取つてのブレスなどを命令させているがあり効果がない。

「忘れとつた!? ミゲル！ 後どんくらいや！」

『残り三十秒。混沌龍。手伝い』

「ツツコまへんで、それは。けどま、好都合やな」

「……『二イイイ』」

回避しながらニヤツと笑う。良哉は「貸し一つ渡したる」と言いつつも右足を揚げた。

「いくで！ 『アンリミデット・ノクターン・チエイン逃れ得ぬ永遠の閉鎖空間』!!!」

良哉の右足が地面を強く踏み込むと、ゾンビのいる場所に銀色の魔法陣が浮かび、そこから多くの鎖と封印の力を持つていると思われる布が出てきてゾンビを縛っていく。が、ゾンビは抵抗の意志として大きく体を動かして拘束から逃れようとしている。

『ギヤアアアアアアアアアアツ!!!! 『ブチブチブチイツ!!』』

「逃さねえよ。『鮮血の拷問杭』!!!

『グサグサグサ！』ギイ……、ギ…………イ……ツ!!』

血でできた杭をゾンビにブツ刺して拘束を強くする。ゾンビは最期までどす黒い感情宿つた目で俺を睨みながら全身を布と鎖で覆われ、球体となつた。

「ふいく、封印完了や。お疲れさん」

「まつたくだ。つうか、リネットは生きてるか?」

「……『プースー』

「湯気が出てるにや」

「生きてますけど、暫くは動けないみたいです」

「そうか。じゃ、ここいらで休憩するか」

「「おう／はい／わかつたにや」「」

「着いた着いた。ここが姫島家さ」

リネットが回復し、十分に休憩を取った後で歩き続け、ようやく姫島家にたどり着いた。思えば結構濃い体験だつたと思う。黒歌と白音を下衆な悪魔から救つたのに始まって出会いと別れ、戦闘をしてきた。そして家族が増えて仲間も増えた。こういうのは元の世界じや実現できないだろうな。

「ねえねえ、翔悟。ほんとに私達も居候になつてもいいのかにや?」「何言つてんだ。またあんな下衆に手をだされちや困るだろ? それに、家族は多い方が良いしさ」

「軽いなあ。ま、そういうところは個人的に好きやけどな」

「それがお兄ちゃんの美点だよ」

「私もそう思う」

「サンキュー」

「にやはは。にやんか不安を抱いてた私が馬鹿らしいにや」

長い階段の前で笑い合う。黒歌にはさつき見せていた不安は一切なかつた。俺は皆の事を話すために先に行くことを伝えて階段を上がる。上がりきつた先に見えたのは神社の前で箒を持って掃除している巫女服を着た朱乃と朱璃さん。朱乃は俺に気づくと箒を放り出して走り、俺に飛びついた。俺は朱乃を抱き止めたが仰向けに倒れるが、そんな事は気にしない。

「お帰りなさい！」
「ただいま。朱乃」

目の前の朱乃の笑顔見てやつと帰れたんだと実感するのが大事だつたからだ。

*あの後、バラキエルさんを連れて来た朱璃さんに黒歌達の事を説明すると、快く受け入れてくれた。黒歌と白音は姫島の性を名乗り、良哉は良哉で恩返しとして『神の子を見張る者』でバラキエルさんの書類整理とかに励んでいた。

旧校舎のディアボロス

邪神龍のモノローグと原作の始まり

トリップして早11年。朱乃と朱璃さんの救出から始まつた原作ブレイクは原作自体が始まる前から続いていき、何人かが原作と全く違う性格になつたり味方になつたりと完全にやりすぎた。が、後悔はしていない。

原作と違う状態になつたので特にそれが目立つのは【ディオドラ・アスター】と【ライザー・フェニックス】・【ギャスパー・ヴラヴィ（バロール）】・【ヴァレリー・ツエペシュ】・【ジャンヌ】の5人と【黄金龍君】ファーブニル】・【黄金龍君大罪の暴龍】グレンデル】のドラゴン2匹だ。

ディオドラは大雑把な説明は俺の設定で済ませられる『メメタア』、が事細かな詳細の一部を説明すると、ディオドラは良哉の仕事の手伝いで冥界に行つた時に会つたが、その時はまだ下衆ではなかつたので、俺がチート能力を作つたり、俺がいた世界でのアニメや特撮等を見せたらそれにはまり、チャンスとばかりに娯楽を提供したり、料理を提供したら俺と何かしらの理由をつけて行動するようになつた。その後、振り回されてる内に慣れたのか染まつてきたのか俺に近い性格になつた（義理人情はしつかり残つている）。今じや女王の元シスター（アーシアじゃない）と両親公認の婚約をしており、何気にいちやつく毎日を送つていてる。

ライザーは4年前に異世界の同じ声の傲慢な性格で利己的な野心家の末路を見せ、「ああなつてもいいのか？」と言い、原作知識の【ドラゴン恐怖症】の事を話すと特訓させてほしいと頼まれた。あの脣みたく情けない姿は嫌だと雰囲気と声色で語つていたからマジだつた。特訓は俺の七割の状態（ドラゴンモードの最弱状態）や仲間の一人とコンビを組んでの猛攻を採用し、ライザーが死ぬ気の覚悟で挑んだ結果、原作のスケベ根性が薄れた変わりに精神が鍛えられ、フェニックス家特有の再生能力が強くなつたため、レーティングゲームでは【難

攻不落の不死鳥』の異名を持つようになった。最近では女王のユールベーナとの間に子供を授かつたと写真が同封された手紙を貰つてゐる（僧侶の片割れに男を加入させたと書いてあつたのは度肝を抜かれたが）。

ギヤスパーとヴァレリーは5年前に夏休みを利用して世界を放浪していた際に監禁されていた場所に辿り着き、一人を連れ出した（追手の吸血鬼達には邪神龍系CQCをお見舞した）後、俺の仲間（クラスはギヤスパーが僧侶。ヴァレリーが戦車）兼家族にした。

ギヤスパーはもう一人の自分であるバロールと向き合い、一体化して原作より遙かに強くなつており、『停止世界の邪眼』と『禁夜と真闇たりし翳の朔獸』を使いこなして突破口を開いたり、無力化させるなど敵に回すと俺並みに厄介な能力を得た。後、女装癖はないが髪を少し長め（某魔法少女に登場する闇の王と同じ長さ）にしている為、女子に間違えられるのがしばしばある。

ヴァレリーは神滅具であり聖遺物でもある『幽世の聖杯』を変化させ、『始祖たる生命の輝き』にした。これはアザゼル曰く禁手である『常識破りな邪神龍の遊び』の生命特化版みたいなものだ。

二人は駒王学園の一年で白音と同じクラスに所属している。

ジャンヌは原作では正確な年齢表記がなかつたがイッセー達より年上つぽい表現はされていたが、この世界では俺と同一年で一時期対人恐怖症と幼児退行を発症した上に喉に障害を持つていた。その当時（5年前の冬休み）の詳細を知つているのは極一部だけで他言無用となつていて。現在ではそれらの症状は治つてゐるが、何故か某魔法少女の甘口カレーが好きなツインテと同じ性格と口調になつた。本当に『どうしてこうなつた?』が合いすぎてモヤモヤした気持ちが頭を埋め尽くしたほどだ。名前もジャンヌではなく、聖美月と名乗つてゐる（本人曰く、表向きの名前）。

ファーブニルは原作みたいたいな変態ではなく、しつかりとした性格（まだコレクター気質は残つてゐる）になつてゐる。俺が用意した神器『龍王の烈槍』に魂を封じており、時々ミニチュアな姿をして

た分身体で出てくるのもしばしばあり、その時は大抵が図書館や俺達関係者しかいない場所だ。『龍王の烈槍』の所有者はデイオドラの兵士の眷属悪魔（元異世界の人間。使用したのはボーンの駒6個）だ。

グレンデルはギャスパーとヴァレリーの救出劇の時、邪神龍の能力を使つた際に魂の欠片が俺の体内に混じり、三年の時を経て復活した。が、混沌の化身である俺の体内にあつた様々な元素・遺伝子・神器のエネルギーが混じつた上に一部相性が悪かつたせいか、チビドランゴンの状態での復活だつたのに加え、本来の攻撃力の殆どを失つていた（一般人よりある程度強い程度）。流石に哀れなので使い魔の契約をし、一日に数分間だけ本来の攻撃力と大きさを取り戻す事にした。その時にグレンデルが本当に邪龍なのかと疑いたくなるような表情は一生忘れないと思う。

まあ、回想という名の説明はここで打ち切りだ。俺の目の前（と言つても木陰から見ている）には光の槍に腹部を貫かれた原作主人公のイッセーこと兵藤一誠と、演技でも何でもなく唯悲痛な表情で涙を流しながらイッセーに謝つて飛び去つた天野夕麻ーレイナーレがいた。ちなみに俺の頭にはグレンデルが乗つかつてゐる。

「おいおい、原作と違う展開だな」

「確かに翔悟の記憶ではあの墮天使は見下した目で赤龍帝を刺したのだつたな。だが、あれではあの墮天使は赤龍帝を、いや誰かを殺したくなかったと言いたげだな」

「ああ。どうやら原作と違うのは俺に関わつた者に限らなくなつたつて事だ」

「でなければ今起きているシチュの説明がつかねえ。とりあえず、『正体不明の外套』でイッセーだけ俺だと認識できないようにして近くとイッセーはこつちを向いた。その目には死に対する恐怖よりもレイナーレの表情が気になつてゐると言いたげな雰囲氣があつた。

「何で彼女は泣いてたか。それが頭に張り付いてるようだな」

イツセーは喋る力も残つてないのか、ゆっくり頷く。

「もしも、だ。君が生まれ変わる、人でなくなつた状態で死の淵から生還するなら彼女にもう一度会いたいか？」

「あい、たい。何で夕麻：ちゃん、が、泣いてた……か、し、り、た：い」

死ぬ間際の最期の力を振り絞るかのように掠れた、しかし強い答えを出して息絶えるイツセー。俺はその答えを聞いて思わず笑う。

「いい覚悟だ。それでこそ主人公だな」

「あなたは何しているのかしら？」

背後から呆れたと言いたげな声が聞こえたので振り返る。そこには鮮やかな紅の長髪と雪のような白い肌が美しさを醸し出す少女「リアス・グレモリー」が俺を見ていた。

「ちよつとした野暮用だ。リアスはどうしたんだ？」
「あなたが呼んだでしょ？ 面白い人間がいるから眷属にしたらどうだつて」

「そうだつた。うつかり忘れてた。まあ、それはおいといて、今死んでいるは今代の赤龍帝だ」

サラリとイツセーが『赤龍帝の籠手』^{ブーステッド・ギア}の所有者なのを告げるとリアスは驚いたが、直ぐに不機嫌な表情で俺を見た。

「翔悟、あなたねえ…。その娯楽主義は止めなさい」
「無理無理。俺は^{デウス・エクス・マキナ}都合主義な最強が代名詞の邪神龍だからな」
「…ハア。いいわ、もう諦めているわよ。この子を転生させるから隠

蔽とこの子を運ぶのは任せるわ

「あいさ了解」

「俺は何をすればいいんだ?」

「グレンは墮天使がまた来た時の戦闘をお願いね」

「おう」

結局、襲撃も目立つたハプニングやトラブルはなく、グレンデルは暫く無言になっていた。

ちよつとした補足

主人公のステータスで登場したものの詳細

・覚醒の駒

翔悟が『常識破りな邪神龍の遊び』^{カオスティック・ワンドーワールド}で悪魔の駒をコピーして創つたもの。悪魔の駒と違い、対象者を眷属してでは仲間として強化される。

対象者は悪魔に転生せず、対象者が望む種族に変化できるようにさせる事ができる上に努力を重ねれば必ず結果が実るなどのメリットがある。

翔悟が仲間にしているメンバーの一部は元々人語を話さないものがいるが、本来の姿でも人語を話せるようになつていて。

・ニヤルラトホテプ

翔悟を拉致＋改造した邪神。

クトゥルフ神話では旧支配者や人間を冷笑していると記されているが、この世界では娯楽や自らの探求欲に素直で、行動している。翔悟と関わつて以来、彼にお仕置き（処刑）されるが、反省することはない。

千の顕現を持つてゐる故に人間や動物、人外ものになることができると、その度に他の邪神（この作品では封印されておらず、某邪神アーネのものに近い）から翔悟に密告されることは上記のものにされる。

・ある兵士

異世界で仲間にした仲間。元々は皆のトラウマの一体でヒントは蟹＋蜘蛛＋ある場所で作られるもの。一部の人ならピンときます。

原作と立ち位置などが違うキャラの一覧（前話以外）

・ドーナシーク

バラキエル・アザゼルに次いで翔悟と関わつてゐる事が多い。

既婚者であり（妻は悪魔と人間のハーフ）幹部の既婚者に負けず劣らずの愛妻家でもある。

幹部クラスに匹敵するほどの実力を持つが、指揮官として動くより

現場で動く方が性に合っていると言つて下級墮天使として振舞つて
いる（アザゼルは特殊な立ち位置の幹部にしようと我策している）。
デイオドラの眷属の一人とは面識がある。

・ジークフリード

シグルドの子孫と教会に所属していた・禍^{カオス・ブリケード}の団の一員なのは原作と同じ。但し、死に場所を求めているような言動が目立ち、魔人化^{カオス・ブレイク}ができない・右目^{カオス・ブリケード}が真っ赤に染まつているなど原作とは違う状態になつてゐる（理由は本編にて）。

・禍^{カオス・ブリケード}の団の元構成員×3

原作では名前も特徴もなくただモブキャラの存在だつた者達。一
人だけが悪魔で他二人は人間（片方は神器持ち）。

禍^{カオス・ブリケード}の団には成り行きや巻き込まれただけで、テロ活動にはあまり同意していない。神器持ちではない人間は未来予知レベルの直感（知つてゐるのはこの三人だけ）を持ち、厄介事に巻き込まれた経験は全くない（上司の命令には一応したがつていた）。

ある任務で直感持ちの人間が死ぬかもしれないと言つたのと組織を抜け出そうと前々から考えていた事が合致し、悪魔が作ったダミー人形で死んだと思わせて組織から脱退した。現在は翔悟の仲間（三人共兵士^{ボーン}）である。

・紫藤イリナ

信仰心がやや薄れている（ランスロットが教会を辞めた理由を偶然聞いたのとある事件を知つた為）。

聖剣以外に道具を使つた結界術を用いる戦闘術を得てゐる。

・匙元士郎

翔悟達と小学校からの腐れ縁。

それ故に翔悟のチートっぷりや悪魔・墮天使・天使等の存在を知つてゐる。

『黒い龍脈』^{アブソーブシン・ライン}

『黒い龍脈』の応用やヴリドラ系神器を中学の時には全て宿してゐる等原作の強化が早い時期に行われている（兵士^{ボーン}なのは変わりないが、その内一つが変異のになつてゐる）。

・木場祐斗

原作では男子だが、この作品では女子になつてゐる。
過去やリアスの眷属なのは同じ。

翔悟が行つた原作ブレイク一覧

- ・朱璃の死と朱乃の墮天使に対する忌避の感情
- ・白音が黒歌に対するわかだまりと黒歌のはぐれ悪魔化
- ・原作6巻と5巻の巻末におけるディオドラの言動と行く末
- ・ライザーのドラゴン恐怖症と性格
- ・ギャスパーの性格と趣味、対人恐怖症
- ・ヴァレリーの神器の禁手と幽閉
- ・ミアル・バアルがバアル領の辺境に追いやられるのと眠りの病の発症
- ・原作三巻の匙のできちやつた結婚発言がない。

ほんのり這いよる異常な日常

イツセー視点

ここ最近奇妙な夢を見る。俺が夕麻ちゃんに殺され、ロープで体を隠した男に質問される夢。それに俺の体も変だ。朝が、もとい朝日がキツいのに夜になると異常と言えるほどのスタミナと身体能力を得るし、気分も高揚する。あの夢に出た男が言つたのが本物なら俺はもう人間じやないのか……？

「俺は、どうなつたんだ……？」

「おはようイツセー！ 「メ〇アル〇ンバー！」」

「ぐぼらつ!?」

「お前らなにしてんだボケ！」《ガシイツ！》

《ミシミシ！》「ぎにゃああああつ!!」

いきなりの衝撃に意識を持つてかれる寸前、聞きとれたのは学園内では有名すぎる悪友の制裁と女子の方の悪友の悲鳴だった。

「お前らなあ。秘奥義とかを使うなど何度言えば解るんだ？」

保健室にイツセーを運び、ジャンヌとクレスをアイアンクローラーしながら説教する。こいつらはあの馬鹿よりはマシだが行動の一部は問題児同然だ。

「無理だろ。この二人は頭は良いのに普段が普段だからよ」

「お、サジ。はよー」

「おう。つうか、この二人は何したんだ？」

「朝っぱらから悪魔になつたばかりのイツセーにメニアル」

「そりや最悪だな。つうか、兵藤が赤龍帝なのか？ あの変態トリオの一人が？」

サジはありえねーと言わんばかりの目でイッセーを見た。普段のイッセーはエロ坊主こと松田とエロメガネこと元浜と合わせて変態トリオと呼ばれているもんな。

「気持ちは解る。けどまあ、こいつは死ぬ直前までになつても死の恐怖はなかつた上に自分を殺した墮天使が何故泣いてか知りたいって言つたからな。リアスを呼んで彼女の眷属にしたんだよ」

「成程な。それより、ジャンヌとクレスが死にかけてんぞ」

「……あ」

「…………（チーン）」

保健室のベッドがさうに二つ使用された。あと、サジはお咎めなしにだつたが、学園の保険医を担当している仲間とソーナにやり過ぎだと怒られた。

「ええ、もちろん」

追撃と言わんばかりに黒歌が朱乃に負けず劣らずの巨乳を俺の頭に乗せて朱乃に今やつている事について訊き、朱乃が了承した。嫉妬に加えて俺限定の殺意も込められたので、一つ警告させておくか。

「朱乃、ちょっと待つてくれ。ツ！（ギンツ！）」

『『『（ビクウツ！）すいませんでした!!』』』

「ん。じゃ、朱乃」

「うふふ、分かつてますよ。あーん」

「あーん」

口を開けると朱乃が一口ササイズで取った料理（ポテトサラダ）を口に入ってくれた。食べると冷めているのにホッコリとしており、中に入っていた林檎のシャキシャキとした食感が控え目に和えていたマヨネーズの酸味とマッチしている。

「うん、美味い。このポテトサラダは朱乃が作ったのか？」

「はい。このお弁当のおかずは全部私と黒歌で作りました」

「そうそう。次は私にや」

今度は黒歌が俺に体を乗せている状態のままで生姜焼きを箸で取つて口元へ持つてきた。つうか、乗つてる（主に胸が）状態でよく持てたな。

「愛に不可能はないにや。あーん」

サイですかと思いながらも生姜焼きを食べる。甘辛いタレと少し多めにいれた生姜の風味が合う。これはご飯が欲しくなるな。

「はい。白米です」

「流石朱乃。俺が欲しいのを直ぐに分かつてくれる」

「うふふ。一番付き合いが長いのは誰ですか？」

「それもそうか」

昼食は朱乃と黒歌といちやついていた（途中リアスが教室に戻ってきて羨ましいと言わんばかりの目で見てきたので今度好きな要望を受け付けると言つたら可愛らしい笑顔になつたのはいい思い出だと記憶している）。

「久しいな翔悟。いや、その格好ではハーミットと呼ぶべきだな」

イツセーが死んだ公園で予め連絡を入れていた協力者と会う。スーツにソフト帽を被つた男だ。背中から鴉のような4対の羽を出していく今しがた飛んできたことを理解させる。

「どちらでもよい、ドーナシーク。しかし、キャラを作るのは面倒だ。今宵は人が来る故にこの口調でしなければいけないのが厄介なところ」

ちなみに思考まではキャラを作つてない。が、口に出す言葉をいちいち変えなければならないのが面倒である。

ドーナシークを呼んだのは原作とは外れたのオリジナルの展開をさせるためだ。原作ではイツセーがドーナシークに殺されかけるが、リアスに助けられる。俺達がやるのはイツセーに一般人ならお伽噺の存在となつている悪魔・天使・墮天使にドラゴン等が実際に存在する事とイツセーが悪魔になり、強大な力を持つドラゴンの魂を持つていることを告げることだ。原作の展開は殆ど役に立たないし、どうせなら俺の龍としての名の基になつたあの駄神の異名の如く引っ搔き回してやろうじゃないか。

「さて、始めようかの、ドーナシーケ。龍と悪魔、天使と堕天使を主とした世にも奇妙な物語を」

「承知した。だが、その表現はどうかと思うぞ」

「そこは指摘するでない」

赤龍帝、知られざる現実を知る

クルクルと歯車が噛み合い、回る。たつた一人のイレギュラーが起こした物語は神でさえ予測できない展開を向かえ続ける。

イツセー視点

「…………すつげー虚しかつたな」

松田と元浜に誘われてエロDVDを見ることになつたが、結果は途中で鬱になつて解散した。松田は涙を流し続けたし、元浜に至つては過去の思い出したくないことを思い出したから俺が止めることを提案したわけだ。エロDVDを見て鬱になるまでにモテない俺達はどうなんだろうな。

どうしようもなく、ただ暗くなつた空を見上げると、普段街灯で見づらいものまでハッキリと見える。本当にどうなつてんだ？　俺は一体どうなつちまつてんだ？

「ふむ。あいつの予想通りの状態だな。急に非日常とも言える出来事や状態が立て続けに起きて動搖しているな、少年」

「!？」

今の俺の心を見通したかのような声にビビつた。
正面を見ると、スーツを着た男がこつちを見ていた。つうか、俺を知つているのか？

「初めましてと言つた所だな。私はドーナシーキ。君の身に起きている謎の正体を知るものだ」

「俺の正体？　どういうことだ？」

「詳しくは私の親友が教えてくれるさ。君が人として死んだ場所でね」

冗談だと思っていたかったが、そういう雰囲気じゃないな。

真実を知るために俺はドーナシークの後についていくことにした。

「ふむ、来たか」

ドーナシークが公園を出て僅か二十分で戻ってきたのを見て立ち上る。イツセーは今の俺の姿を見て驚愕しているのは笑えたが、それを表情に出さないようにしながら近づくと、イツセーは驚愕した顔をしたので思わず笑つてしまつた。

「クツハツハツハ！ そう感情を露にさせるものかの？ 我はお主があつた者の師にあたるものであるハーミットだ。ドーナシークとは旧知の仲とでも言つておこう」

「ハーミット…。確かタロット占いにあつたカードだつけか？」

「うむ。我は^{ハーミット}隱者^{ハーミット}の名を持つが故に知識は豊富だ。お主が一度死に、人ならざるものになつていても、お主を生かした者の正体も知つておる」

「あれは夢じゃなく、現実だつたのか…」

「うむ。旧支配者達が絡むものでなかつただけマシだと思うが、そこは本題から逸れるからなしだ。さて、回りくどいことなく事實を告げよう。お主はここで悪魔として転生したのだ」

「悪魔。つてことは今俺の体調が良いのは…」

「悪魔である証拠だ。ドーナシークは墮天使で我はドラゴン。証拠はこれを見れば十分だろう？」

神器の上から翼を出す。イツセーはそれを見てアングリと口を開けて呆けたので今度はドーナシークもつられて笑つた。

「ハツハツハ！ 全く笑える反応だな」

「クハハ、だろう？ 我の周囲は胆が据わっている奴等ばかりで全く面白くなかったからこれはツボにはまりそうだ」

ホントこういうのは最高だ。仲間は何気に梅組のノリに近い状態ばつかだつたし。流石にアーシアは純粋キャラにさせたいな。いやほぼ無理かあの愉快犯眼鏡がいるし。

「何をしているの？」 翔悟

「あ、リアス」

「リアス先輩!? というか翔悟!? どうなつてんだコレエツ!!!!?」

リアスに視線を向けて直ぐに俺の方を向きパニくるイッセー。それを見てこの前と同じため息を吐いたリアスはやはりあの時同じ目で俺を見た。

「あなたはまたこの前と同じことをして楽しいの？ それにドーナシーケさんも」

「いやー仲間は色々と外道なクラスみたいになつてるし、大人にこういうの吹つかけるのもなんなんだし、で」

「仕事の合間にこういうのもオツだらうと思つてな」

「ホンッと貴方達は言動が不純だわ」

「あのー、リアス先輩。話が見えないんですけど？」 というか何でリアス先輩がここに？」

話についてこれでなかつたイッセーの質問にリアスが反応する。俺も神器の発動を解除した。

「そうね。詳しいことは翔悟が知ってるけど、ここは私が説明するわ」

詳しいことはの部分で俺達にジト目を向けつつもリアスはイッ

セーに悪魔と天使、堕天使の存在と歴史の説明をする。

報告と自己紹介

イッセーに彼は説明した翌日。

「そらそら！ 避けながら攻撃を入れてみろ！」

駒王学園の体育館でイッセーと組み手を行っていた。ハンデとして俺は蹴り技しか出していないが、イッセーは必死に回避するだけだ。時折直感で避けているらしく、ある程度の戦闘技術の才はある。

「のわあつ!? ちよ、まつ！ 避けるので精一杯だつての!!」

「白音なら避けながら腰の入った右ストレートは出せるぞ。お前もそれぐらいできるようにならねばあの時の繰り返しになるぜ?」

「んなうおつ！」

——30分後

「ぜえつ、ぜえつ」

「5発か。ま、初心者としては十二分なレベルだな」

「思いつきり、手加減でこれつて、キツイな」

「そうか。俺の仲間の人間一人は10分で100発当てるぞ。もつとも、俺が防御してのがつくが」

「それが俺だ」

体育館の出入り口から声がしたので視線を向けると、黒いジャージを着たポニテの女性がビニール袋を片手に持つて立っていた。

「お、黒燕。どうした？」

「藤川先生？ つうか黒燕って何だ？」

「ん？ ああ、私は翔悟の仲間の一人でな。黒燕は俺の忍の名だ」「忍者もいるんだな……」

「京都とかには妖怪や土地神とかがいるけどな。もつとも、一般人には認識できないぞ」

イッセーは「マジか…」と言つたきり僅かに呆然としていたが、両頬を軽く叩くと吹っ切れたかのように立ち上がった。

「一々悩んだりするのは性に合わねえ。それに俺は後悔はもうしたくねえ」

「その意気だ。そんじや休憩した後教室にもどるぞ」

「ああ」

「頭領。後で報告があるんだが昼休みはいけるか？」

「大丈夫だ。問題ない」

「返事でネタに走るなよ」

何にでもなれて何でもなれない邪神がベースだからな。

「で、報告とは何だ？」

「赤龍帝を殺した墮天使を脅迫して操つてるやつがいた」

「詳しい情報は」

「掴んでいる。向こうが慢心しているのとリックの第六感のお蔭でな」

「それじゃ頼む」

昼休みに旧校舎の一室で黒燕の報告を聞く。内容はやはり原作と違うもので【レイナーレ】・【ミッテルト】を脅迫、別でドーナシークとカラワーナ駒として操つてている墮天使が存在し、そいつは自分の欲のために【アーシア】の神器を抜き取つて利用するとの事。8年前の悪魔と同じ輩か。

「ドーナシークはスペイとして潜入してるのは本人から聞いてるがカラワーナはどうなんだ？」

「彼女ならシェムハザが送ったスペイだ。ドーナシークと同じタイプで本来は中級以上上級の中間ギリギリ下の実力だが、普段はそれを隠している。知つてるのは【神の子を見張る者】内で頭領と深く関わってるメンバー位だな」

「マジか」

色々と原作ブレイクした俺が言うのもなんだが、一部の原作キヤラ大幅強化されてんじゃね？ 知らないキヤラもてるかもしねんな。

「報告はこれで終わりか？」

「あと1つだけ、アーシア・アルジェントが近々廃教会に送られる」「そうか。一応ディオの眷属の内二人が移動販売やってるし、ディオを通してアーシアの保護か監視を任せておくか」

あの夫婦は人間の時から人間離れしていたし、黒幕が来ても返り討ちにするだろうし。イッセーの事も伝えておくかな。

「いちの
一埜にも連絡しておくか？」

「あいつは黒幕潰しに出るようしてくれ。そこのサンプルになるだろうし」

「確かに」

キヤラが濃い仲間達の中でダントツだもんなあいつ。女だけど変態で医者だけどマッドだし。黒幕は最悪元の姿を保つたままゴーレム化しそうだな。

「方針は決まつたし、一時解散。放課後オカ研部室な」
「了解」

さあて、イレギュラーラーによつて大きく変わつた原作はどうなる事やら。

「お兄ちゃん」

放課後、首を軽く回しているとリネットが教室に来た。珍しく白音とギャスパー、ヴァレリーとゼノにルナがいない。

「おう、リネット。いつもいる5人は？」

「先に旧校舎へ行つたよ。あとは私とお兄ちゃん、イッセーさんだけ」

「そうか。そんじや向かうぞ、イッセー」

「お、おう」

机に掛けていた鞄を持ち教室を出る。その時間こえた腐女子会話に鳥肌がたつた。

多少古びた木製の床を歩き、二階へと上がり、奥へと進む。現在俺達以外が使う事のない旧校舎は塵や埃、蜘蛛の巣一つない。

「相変わらずネルフの掃除は完璧だね」

「だな」

「ネルフって誰だ？」

「俺の仲間の一人で種族はアンデット。つまり死者だ」

「え？ つまりゾンビなのか？」

「極端な言い方をすればな。ネルフやその他諸々については目的地に着いてから話すから一端待ちな」

話す事が結構あるから廊下で説明したら確実に時間がかなり経過するから一端話しをバツサリと切る。イッセーは何となく理解したのかすぐに黙つている。

話を断つて少し経過した後、目的地であるオカルト部へと到着した。部屋の中からは何かバカな事をやらかしたのかジャンヌの『ギャワーッ!!』という悲鳴が響いている。

「ジャンヌが何かバカやつたみたいだね」

「だな」

「ジャンヌ？ 今の悲鳴は聖だろ？」

「そこも含めて話す。ツタク、頭はいいのにバカなんだよなあいつは。おーい、イッセー連れてきたぞ」

ノックすると、『少々お待ちください』とネルフの声がし、ゴンと鈍い音が聞こえた後『どうぞ』と入室許可が出た。心の中で合掌しつつ入るとリアスと朱乃。白音に木場祐斗のTSである祐璃のアニメ第一期の初期オカルト部メンバーと黒歌、ギャスパー、ディオドラの原作メンバーに加え、学生または教師である俺とディオドラの眷属達が揃っていた。ただし、ジャンヌとクレスは頭に漫画版タンコブを作つて横たわつており、二人の傍で青白い肌のメイドー・ネルフが右手をプログラミングさせている。またバカやつて体罰をくらつたんだろうな。

「学園の有名人が殆ど揃つてゐる!? どうなつてんだ翔悟!？」

確かに学園内では知らぬ者なしばつかだもんな。二年では俺と仲間達に祐璃、ディオドラと眷属の女王であるナタルのバカツップル。三年はリアスや朱乃、黒歌、ディオドラの戦車の片割れであるノックス。一年ではご意見番のリネットとマスコットの白音に加えて一部の女子からパルパルされているギャスパー＆ヴァレリーと常識ある不良（もどき）で有名なルナ。教師では異性のファンが多いランスロットとレイにメデューサ。そして学園の番犬ならぬ番狼であるジャック。

元々ただの学生だったイツセーから見れば驚愕ものだ。

「期待通りのリアクションをありがとうイツセー。とりあえず昨日のも含めて説明するからとりあえず座れ」

イツセーをソファーアに座らせ、反対側へと移動する。位置はリアスが座っているソファーアの後ろだ。

「まずは昨日のおさらいだ。悪魔と墮天使が人間が言う地獄の霸権を巡つて争い、天使は神の命で悪魔と墮天使を全て倒そうとして三すくみ化しているのは覚えているな?」

「ああ。昔の大戦争で三勢力全てから多くの犠牲者が出てたんだつな。で、上級悪魔は才能ある者達を悪魔^{イーヴィル・ビース}の駒を使つて眷属とし、で、眷属は成長次第では爵位を授けられるつてのはリアス先輩から聞いたぜ」

「グッド。で、天野夕麻とデートした翌日以降は極一部を除いて彼女の事を記憶していない。その理由はわかるか?」

「……夕麻ちゃんが俺を殺した後、周りから記憶を消した、だろ」

「そう。天野夕麻はあなたを殺した後、自身の記録と記憶を全て消した。けど、あなたを殺したのは彼女の意思ではない。彼女を自身の都合の良い駒にされているの」

「どういう事ですか!?」

リアスの言葉にイツセーが立ち上がる。自分を殺した理由がバツクからの命令ならそうなるわな。

イツセーの行動に対し、動いたのは黒燕だ。

「そこは私が説明しよう。天野夕麻。墮天使としての本名はレイナー
レーナー。だが、彼女はある上級墮天使に脅迫されている。そして、その墮天使は何かしらの目的で邪魔な存在である兵藤を殺すようにレイナーレに命じた。尤も、その墮天使にとつて予想外な存在は多くいたのだ

がな」

そう言つて黒燕は部屋にいるメンバー全員を見る。皆の反応はバラバラだが、一部はあくどい笑みをしていたから報復について色々考えるだろう。

「そこについては情報が入り次第行動する事にする。兵藤。お前はその時に重い一撃を喰らわせてやれ」

黒燕の言葉にイッセーが領き、頭が少し冷えたのかソファーへと座る。

「さて、三大勢力云々はまたいつか話すとして、ここに駒王学園の有名人がほぼ揃つてゐる事を説明しないとな」

「そうだつた！ 何でここに集まつてんだ!?」

「そりやここにいる全員がリアスとディオオドラーの眷属か俺の仲間だらだ」

「はあ!？」

またも同じリアクション。

「最初はリアスな」

「ええ。まずは祐璃からお願ひ」

「はい。私は木場祐璃。兵藤くんと同じ二年生なのは知つてゐるよね。私も悪魔です。よろしくね」

「一年生。姫島白音です。よろしくお願ひします。私も悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。いちおう、オカルト研究部の副部長も兼任しております。今後ともよろしくおねがいします。私も悪魔ですわ。うふふ」

「私が彼女達とあなたの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね。イッセー」

リアス達の自己紹介が終わると、ディオドラとナタル、ノックスに身長が白音より頭一つ大きい小柄な一年が前にでた。

「次は僕達だ。僕はディオドラ・アスター。リアスと同じく純粹な悪魔さ。よろしく」

「ディオの女王にして恋人のナタル・フェルミノスです。元シスターですが、種族や人種に対する忌避の感情は持ち合わせていないので安心してください」

「三年、ノックス・ランバー。ポジションはルーク」

「ランバー先輩」「ノックスだ。敬語はいらん」ノックスは不死身の守護者で合つてるよな？」

「ああ。特殊な体質でな。普通の人間では死ぬ状況でも少しの怪我で済む。それを活かして人助けしていたらそう呼ばれた」

「俺で最後ツスね。一年生、ゼノ・マグリアツス。ポジションはポンツス。よろしくツス」

ディオドラ達の紹介が終わり、俺達の出番となつた。その前にジャンヌとクレスを『出番ですので起きてください』『(ゴス) イダアアアアア?!』起きたからいいか。

「最後は俺達だ。一応警告するが、リアスやディオドラと比べてキヤラや存在とかが濃い集団だから腹括れよ。そんじや、教師陣から頼むわ」

俺の言葉に反応して黒燕、ランスロット、レイ、メデューサがディオドラ達と入れ替わりで前へ出る。予め打ち合わせしておいたので滑らかに進行できている。

「まずは僕から。英語教師のランスロット。元教会の人間だけど現在の魔王達と墮天使の総長とは個人的なパスを持つてたから忌避感は

ないよ。翔悟のメンバーの一人でポジションは騎士。よろしく」

「体育担当、藤川椿。兵藤は体育館で話しているから余計な説明は蛇足だな。ポジションは歩兵だ。今後ともよろしく頼む」

「数学教師、レイ・ワインスレイドです。元々は異世界の女神でしたけど、今はリーダーの僧侶を勤めさせていただいてます」

「保険医のメドューサ・ゴーゴン。生まれながらの魔女でポジションはレイと同じく僧侶よ」

「なあ、色々とおなかいっぱいなのに食後にTボーンステーキを叩きつけられるのを幻視したんだが……」

「女神と魔女だけマシだろ？ 駒王学園に通つてないやつらの中には宿主の魂を乗つ取つて行動する疫病や魂を喰らう鬼とかもいるし」

「マジか…」

「まあ、クレスは元々人じやないんだがな。それは本人の口から聞いてもらうぞ」

教師たちが下がり、今度は学生メンバーが前に出る。

「まずは私にや。三年、姫島黒歌にや。ポジションは僧侶。よろしくにや♪」

「二年聖美月。英雄ジャンヌ・ダルクの子孫で本名もジャンヌだからよろしく！ ポジションは騎士だよ」

「同じく二年！ 八咫^{やた}柴^{しば}クレス！ 種族はヘラクレスオオヨロヒグモ！」

「ヘラクレスオオヨロヒ？ 聞いたことないんだが…」

「そりや異世界の生物だもんな。

「俺達の仲間やディオの眷属の一部は平行世界や異世界の住人なんだよ。で、ヘラクレスオオヨロヒグモは背中に背負つた道具なんかを魔改造武器として使う事ができるんだ。クレスの場合、生物・無生物問わず背負つたものの能力等を武器として扱える。後、何かを背負つて

いると核でも耐えれる特殊なバリアを纏う

「何だそのチート」

「その代わり何か背負つてないと非力+攻撃手段がないのが弱点だな。クレスは例外だが」

「どつちにしろ敵に回したくねえよ」

「ここにいる殆どがそうだけどな。んじゃ、続き頼む」

「二年生、呉羽リネット。お兄ちゃんの義妹でポジションは僧侶です」

「二年。ルナ・フィリス。ポジション、ルーク」

「一年生、ギャスパー・ティムノートです。ポジションはビショップを担当しています。こう見えて男です」

「二年生、ヴァレリー・アルトステイツよ。ポジションは塔。ギャスパーと幼馴染なの」

一年生組も終わり、ここにいるメンバーでは残りは俺とネルフだけだ。先にネルフが前に出て、メイド服のスカート部分の先を持つてお辞儀した。

「人の技術によつて誕生した動く死体、【ドール】のメイド、ネルフと申します。よろしくお願ひします、イッセー様」

「そんで、さつき紹介したメンバーの纏め役である呉羽翔悟。元人間のチートな邪神龍だ。改めてよろしくな、イッセー」